# 美術教育における「織り」の実践的研究Ⅱ

Practical Research on「Weave」in an Art Education　Ⅱ

堀　祥子*・冨岡卓博**
Sachiko HORI and Takuhiro TOMIOKA

**キーワード**：織り　手織り　裂き織り　五感　ものづくり　美術教育　学校教育

## はじめに

近年の「ファストファッション(注1)」「ファストフード(注2)」なる言葉に代表されるように，私たちのライフスタイルは多様化し，人としての生活に密接する多くのものは，工業製品として大量生産され安価に手に入る様になった。それにともない，消費活動があたりまえとなることで，与えられたものに何の疑問を持つこともなくなり，それが何で出来ており，どこの誰の手によってどのように作られるのか考えようとも知ろうともしない，安易に享受するだけの生活となった。

人の生活を表す言葉である「衣・食・住」を改めて見直すきっかけとして，先の織りの実践研究(注3)では「織り」の行為の現代化と新しい造形教材の開発を試み，学校教育の中やあそびの中で楽しく，初期的にそして段階的に導入しながら教材としての可能性を考察した。その結果，織りの行為を「身近な素材を使った造形」「自己表現としての織り表現」という視点で，今日の子どもの実態を見据えた教材開発ができ，その有効性を見いだすことが出来た。

よって，本論ではこれを踏まえた上での教材開発と実践とをそれぞれに深めていく。先の実践研究ではまず織りの仕組みについて述べ，そのドリル的教材の開発と実践を主とした。そこで出来上がる作品の効果は，扱う素材と方法によって偶然がもたらすものであったが，本論では最初から出来上がりの作品をイメージし，デザインしながら作るための教材開発と実践とし，「織り」教材の可能性を拡大することを目的とする。それと同時に「織り」の行為から，人の持つ五感を十分に使うことで新たなものを生み出し，それを伝え，試行錯誤の中で新しいアイディアを生み出し，さらに新しい形へと進化させてきた人間の本質的な行為，すなわち，「ものづくり」がもつ魅力を明らかにし，より創造的な教材開発を目指す。

## Ⅰ　実践報告

先の毛糸絵の実践研究(注4)では，毛糸などの線材で「刺しゅう」によって既製品の紙や布に描画する題材を取り扱った。織りの実践研究では，毛糸などの線材を「織り」によって面材に変化させ，そこにデザイン性を持たせ美術的要素を加える事を目的とした。

本論ではそれらの考察から得た視覚的効果と触覚的効果による経験の重要性をふまえながら，教材開発にあたって次の事を留意した。

1）教材に取り組む中で，人に備わっている身体的な感覚を存分に活用できるものとする。
2）教材に取り組む中で，教えられた通りのものから，新たな創造のアイディアをもたらすきっかけと可能性を導きだすことができるものとする。
3）学校教育の中や遊びの中で，人間の生活を表す「衣・食・住」を改めて見直し，ものつくりのよろこびを五感で感じ取れるものとする。

以上のことを踏まえて，織りの発展的教材を

*　岐阜大学大学院教育学研究科美術教育専修
**　岐阜大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Gifu University

試行した。

織りを教材として授業に取り入れたほとんどの学年では，その行為の経験の有無にかかわらず，こちらの提示した資料サンプルや手順をみることで，その色合いや触った時の感触に興味をもって取り組むことが出来た。

また，織りの基本を知る事で，どちらかというと美術に苦手意識を持つ生徒・学生ほど「自分にも出来る」という自信につながった様子であり，結果，積極的に取り組む姿が見られた。

先の実践報告と同様に，準備や道具を指導者側で工夫する事で，園児や児童でも十分に展開可能である。

**実践の方法**

実践報告する内容は３つで対象者と年齢と実施時を異にしている。

- 実践１（身の回りの小物づくりのための織り実践）は，短期大学生３年生美術選択者を対象にして個人制作をおこなった。
- 実践２（織り教材の展示のための実践）は，短期大学生３年生美術選択者を対象にして先の織りの実践２(注5)で制作した作品を，共同で壁面構成とした。
- 実践３（共同制作としての織り実践）は，中学１～３年生美術部の活動において共同制作した。

**実践の目的**

織り教材をさらに発展，展開すべく下記の４点を目的とした。

- デザイン性の展開
- つくられた作品の個別性の調査と検証
- 織りを生かした教材のさらなる発展と工芸作品としての展開
- 大型作品への挑戦的教材の展開
- 展示方法の検証と可能性

本実践の得られた成果と問題点を明らかにする。

**実践報告**

**実践１（身の回りの小物つくりのための織り実践）**

**（１）対象者と指導者および実施時**

- 対象者：私立岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育科３部３年生，美術表現Ⅱ選択者
  女子13名　男子２名　合計15名。
- 指導者：堀　祥子（同校非常勤講師）
- 実施期：平成20年12月，６時間（１コマ90分，４回）

**（２）実践方法**

今回の実践の対象としたのは卒業年度にあたる３年生で，後期の選択科目である美術表現Ⅱは，ひとつの課題にじっくり取り組むことで，美術により親しみを深めることを目標にしている。

先の織りの実践研究の実践２では，空き箱の織り機(注6)を作成し，10㎝四方のテストピースを試作したが，その経験をふまえた。自分の身の回りで使えるものを想定し，デザインを考えたうえでの実践とした。

制作するにあたり，準備として下記のものを求めた。学校教育の場で実践に取り組みやすいように，道具の簡略化も踏まえた。

- 空き箱（A4サイズほどの大きさ）で織り機を制作，各自用意。
- たて糸とよこ糸として，毛糸・古布（使い古したＴシャツやタオル，はぎれ，ネクタイなど長細く裂いて糸として使用）を各自持参した。
- フォーク（プラスティック製15cm長）生徒数。筬の代用として使用した。
- 手製毛糸針を，菜箸とヘアピン（U字型のもの）で制作し綜絖(注7)と板杼(注8)の代用として利用した。
- ３㎝幅に長細く切った厚紙（一人当たり２本）を，捨て糸の代わりに使用した。
- 縫い糸やボタンを必要に応じて個人で適宜準備した。

通常の授業通り，美術室にて作業をすすめた。空き箱で手織りを制作しテストピースを制作。次に身の回りの小物をつくるために必要分の布地の大きさを想定し，模様をあらかじめデザインした後，各自で材料を集め，実制作を通して個別指導を行った。

制作の手順

① 空き箱で手織り機のフレームを制作するよう求め，テストピースを制作したところ，織りの持つ行為性にほとんどの学生が興味を持つ事が出来た。出来上がった織物の見た目や手にした時の風合いなどから，筆入れやポーチ，携帯プレイヤーケースなどに応用することが出来そうだとさかんに意見が飛び出した。そこで，次は自分の身の回りで使う事の出来る小物づくりを提案したところ，男子を含むすべての学生が興味を示した。

② そこで，自分の意図とするものをイメージし，大きさや色合いに材質を各自考えることにした。それを作品にするために糸になる材料を揃えて，テストピースと同じ要領で制作をすすめた。

③ 作品の大きさに合わせた大きさの空き箱を準備し，新たな織り機を制作する者や，先の実践で制作した織り機を流用する者など，個々に制作がしやすいように工夫した。また，作品に取り付ける紐やボタンなどを別に用意し，裁縫の知識と合わせた技法で仕上げとした。

### （3）展開の様子

**・材が持つ風合いから発想し，個々のテーマを決める。**

今回の実践の前に制作したテストピースから，学生たちは素材の持つ暖かさや，作り手の雰囲気をそのまま伝える良さが「織り」の行為にはあるということを理解した。作品を手にしたときに，その効果を確認出来るようなものづくりへとテーマを発展させた様子であった。また素材選びにおいて，用途に合わせて裂いた布や毛糸を使い分けしたり，中にいれるものによって，織り目の調整をしていく姿が見られた。そこからテーマの個別性が顕著に現れた事を認めることが出来た。

**・与えられた教材から，自らの意図に添った加工へ展開していく姿**

織りの持つ手触り感から，「何かをくるむ」作品が多く見られた。そのためには，織り上がった布を袋状にし中身が落ちないよう留め具などの取り付け等の加工が必要となる。そこで，学生たちは指導者から与えられるままの課題にとどまらない活動を展開する事となる。ここに試行錯誤がなされ，友人同士の意見交流の中，よりよいものづくりへの意欲を見いだす事が出来た様子が見いだせた。指導の枠を越え，活動はより良く活発となった。

**・自己表現に価値を見い出し，認めあう**

学生たちはテストピースの制作から，織りの基本形を学び試行と練習をすることで，自分の技術として習得することができた。後は，各自で素材の組み合わせや方法をアレンジすることで，さらに試行と練習を繰り返し，疑問や問題点を修正しながら，自己表現へと発展させていった。さらにそこに自ら作品の価値を見いだし，完成を喜ぶ姿が見られた。

また，お互いにすすんで作品を鑑賞しあう姿から，お互い認めあうことでさらに自らの作品への価値を深めていく様子も見られた。

### （4）実践１のまとめ

**・工芸作品としての展開へ**

自ら作品に自ら価値を見いだし，完成を喜ぶ姿が見られた。いままで無造作に鞄の中に入っているだけの携帯電話や判入れなどが作品の中に納められると，とたんに愛着が湧いた様子であった。何度も出し入れを繰り返したり，違うものを試しに入れてみたりする中で補強や改修を試行する姿も見受けられた。これは日常の使用に耐えうる必要がある工芸作品としての要素を学生が学んだ証拠と言える。よって本実践は工芸領域への展開の可能性があると考える。

制作終了時にはさっそく身につけて教室を出て行く姿も見られたことから作品の出来具合への自信と愛着をうかがうことができた実践となった。

**実践１での作品例**

全員の作品で，そのデザイン性から個別性を十分確認できる。幼児教育科の学生ということもあり，園での実習体験や他の授業での試みから，生活体験が豊かであることを裏付ける工夫が多くみられた。既製品にはない，人の手の仕事が持つ良さをあらためて実感出来る作品群といえる。

**実践１作品事例―１　A男の作品**

素材である毛糸の持つ柔らかくあたたかな風合いを，色使いをモノトーンに統一する事で，シャープな印象となるようにデザインを心がけた作品である。

また，蓋の部分の閉じ方にもアイディアが見られる。ボタンホールを開けなくても良いように三つ編みにした紐を取り付けて，ボタンに引っ掛ける構造を選択した。

**実践１作品事例―２　B子の作品**

３種類の個性が違う毛糸を上手く配置し，ストライプになるように工夫した。中身が落ちないように，作風に合わせた可愛らしいボタンを取り付けた作品である。

**実践１作品事例―３　C子の作品**

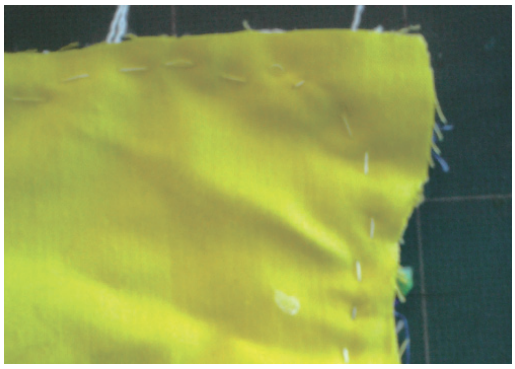
社会人となるにあたり，欠かすことの出来ない印鑑にケースを作った。堅実な印象になるように地味な色を選び，固い織り目で制作した。

留め具は紐とし巻物のように処理する方法を選んだ。

**実践１作品事例―４　D子の作品（上段：表面，下段：裏面）**

同じ素材で色違いの毛糸で一枚の布を織り，その両端を裏面に折り返すことで，ブックカバーが出来上がった。表面には猫のブローチを取り付け，紙製のカバーでは出来ない個別性を出すことに成功している。

また，布の端を補強するために，ブランケットステッチ(注9)を施してあり，この学生の生活体験の豊富さを垣間みることが出来る作品となった。



**実践１作品事例―５　E子の作品（上段：表面，下段：裏面）**

ランチョマットにするために，汚れても洗濯がしやすいように，毛糸ではなく裂いた布を使い，４枚の布を織り上げた。さらに中央部分にマークがくるように配置したデザインでパッチワークした作品である。マークの上には別布で切り取った目と口のパーツをさらに縫い付けて表情を加えた。たて糸の間隔が粗いため，表地を補強する用途で裏面に別の布を裏打ちした。

織り目の素朴さに加えて，生活体験から生み出されたアイディアが重ねられた，味わい深い作品である。

**実践２（織り教材の展示のための実践）**

**（１）対象者と指導者および実施時**

- 対象者：私立岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育科３部３年生，美術表現Ⅱ選択者
  女子13名　男子２名　合計15名。
- 指導者：堀　祥子（同校非常勤講師）
- 実施期：織りの部分，平成20年11月，６時間（１コマ90分，４コマ分）
  壁面構成の部分，平成20年12月，４．５時間（１コマ90分，３コマ分）

**（２）実践方法**

今回の実践の対象としたのは卒業年度にあたる３年生で，後期の選択科目である美術表現Ⅱは，ひとつの課題にじっくり取り組むことで，美術により親しみを深めることを目標にしている。

前号での実践２において空き箱で手織り機を作成し，約10㎝四方のテストピースを制作した。織り終わって織り機からはずす前の段階で，数人の学生から「織り機が額縁のように見える」との感想が聞かれた。この意見をクラスで取り上げたところ，個々の作品を壁面構成する事で一つの大きな作品にして記念にしてはどうかとの意見が出され，全員が賛同した。そこで，講師が一つテーマを決めて構成してはどうか提案したところ，季節的にクリスマスがテーマとなった。

制作にあたり下記のものを求めた。

- のり，はさみ，定規。飾り付けの工作で使用するために用意した。
- 両面テープ・画鋲。作品を壁に固定するために用意した。
- 色画用紙（再生紙）・折り紙・パンヤ綿。テーマに沿って飾りをつくる材料として用意した。

通常の授業通り，美術室にて作業をすすめた。学生同士でどのような壁面構成にするかを打ち合わせしたのちに，制作を通して個別指導を行った。

**制作の手順**

① 出来上がった個々のテストピースを，空き箱の手織り機を額縁に見立てる事で，一つの作品としてとらえた。クラス全員の作品を壁面構成する事で，大きな一つの共同制作とするために，話し合いでその方向性と計画を立てた。

② まずは空き箱の手織り機を壁面に構成するため，画鋲と強力タイプの両面テープを用いて壁に固定していった。

③ その後，色画用紙や折り紙など，別紙でパーツを作り，付け加えてもよいことを伝えた。

**（3）展開の様子**

**・共同制作としての可能性**

先の織りの実践研究の実践2において，よこ糸を友人と交換したり，大きな布を裂く際に2人一組で引っ張り合うなど，積極的に友人と共同で作業を行う姿が見られた。園での教育実習や人形劇制作など共同で制作することが習慣となり，身についている証であるといえる。

**・全体の見通しを立て，制作をすすめる**

先の織りの実践研究の実践2での個人制作においては，その場でアイディアを思いついて制作をすすめていく姿が見られた。しかし，本実践ではクラス全員での話し合いによって常に全体の見通しを持ってすすめていく姿が目立った。

**・いきいきとした共同活動**

全員が各自のテストピースを仕上げた後に，クラス全体で一つの作品に仕上げるため，テーマに沿って壁面への構成を行った。制作時期に合わせてクリスマスをテーマとし，話し合いによって具体的に方法を決めた後に，グループにわかれて制作に入った。

幼児教育科では，パネルシアターやグループでの演劇つくりなどで共同で授業をすすめていくことを求められる機会が多い。彼らはその成果を発揮し，話し合いはスムーズにすすみ，役割分担する場面ではおのおのの得意分野で積極的に参加し，大変いきいきとした活動となった。

**（4）実践2のまとめ**

この実践で，学生の積極的な取り組みから，「織り」の教材の意義や楽しさを実感しながらさらに，共同で展示する活動へと発展させ出来た。卓上にとどまらず壁面に構成展示する事で自分の作品を客観的に見る事と，他の作品との視覚的にミックスされた別の大きな作品の一部となった事は彼らにとって新鮮なよろこびをもたらした，大変良い教材となった。また，大掛かりな作品制作となったことで参加した学生全員が全身を動かして活動する様子からは，この実践に意義があったことが明白であることがいえる。

普段は与えられた説明や指導があって作品をつくるだけの受け身の姿勢であった学生たちが，この活動を通して，まぎれもなく自分自身の作品であるとの実感と満足感を得た事は，ものをつくる上において大変重要なことであると考える。

**実践2での活動の様子と作品**

実践2において，実践Ⅰ同様に活発な活動となった。学生たちの様子や発言からは「授業の中で指導者から与えられた教材」としてではなく，自発的な活動としてとらえていることが汲み取ることが出来た。

**実践2　制作中の様子―1　空き箱織り機で制作中の学生**

この色にこの糸はあうだろうか？とデザインを試行しながら考えている姿。

**実践２　制作中の様子―２　共同制作に取り組む学生たち**

話し合いを重ねて，個々の作品を並べたり崩したり繰り返し試行しながらデザインを考え，一つの大きな作品にまとめていく姿。今回はクリスマスがテーマであるためにツリー型が最終的に採用とされたが，これ以外に織り機を「田の字型」に配置してプレゼント箱に見立てるアイディアなど，意見交流の中でより良い作品にしようとする自発的姿勢が見られた。

**実践２　制作中の様子―３　共同制作に取り組む学生たち**

作品の裏側にボール紙をテープ状に切り支持体として張り付け，画鋲で壁に取り付けていく過程。重量があるため，両面テープも併用した。一人が離れたところでバランスなどを確認しながら活動している。

**実践２　制作中の様子―４　　作品部分拡大**

授業内で仕上げた作品にさらに折り紙で折った飾りなどをパッチワーク的に取り付け，より楽しい作品へと改良していく経過である。さらにモールや切り紙で制作した飾り，色画用紙でつくった帽子などを貼付けたことで，過去に授業内で行った活動も取り入れることが出来た。

**実践２　制作中の様子―５　完成した作品**

一年間の授業内の活動を凝縮した作品となった。過去にこのような規模の作品制作の経験がなかった学生にとって，大変満足のいく制作体験となった様子であった。また，他のクラスの学生たちの目をひきつける作品となったため，活動した学生たちの中には，よろこんで仲間と一緒に記念に写真撮影するものも現れた。学生たちからの要望もあり，しばらくはこのまま壁面に展示しておくことにした。冬休みが終わったのちに学生たちが解体した。

### 実践３（共同制作としての織り実践）

実践１では織り教材における個人制作であった。実践２では個人制作から展示作業における共同制作であった。それらを総合的に組み合わせて展開させるため，この実践３では織り教材の大型化と共同制作を試みた。

#### （１）対象者と指導者および実施時

- 対象者：私立岐阜聖徳学園大学附属中学校１・２・３年生，美術部員
  女子６名（２年生２名，１年生４名）
  男子３名（３年生１名，１年生２名）
  合計15名。
- 指導者：堀　祥子（同校非常勤講師）
- 実施期：平成20年７月～８月，８時間（週１回，放課後１時間と夏休みの部活動期間）

#### （２）実践方法

今回の実践の対象としたのは中学生の美術部員で学年や男女の人数構成がさまざまである。岐阜市の依頼で11月に行われる「環境まるごとフェア」の広報の一貫として，フラッグアート(注10)を制作した。この年度は１年生が多く入部したこともあり，共同作業を通じて部員同士のコミュニケーションをはかる絶好の機会ととらえ，同時に美術により親しみを深めることを目標にしている。

実践にあたり下記のものを準備した。

- フラッグアート用布（厚手シーチング地）。たて３ｍ×よこ1.8m。岐阜市より配布されたものを使用した。布の中央部分にたてに切り込みを入れることでたて糸として利用した。
- 固定用木枠。たて3.1m×よこ1.9m。フラッグアート用布を固定し，平らに置くのではなく，たてに置くことで作業しやすくするために，ホームセンターで市販されている建材用角材で製作した。
- 各種布。生徒の各家庭から使用済みの布を持ち寄り，裂き織り(注11)の要領でよこ糸として利用した。
- 針と糸。ボタン付けなど家庭で一般的な木綿手縫い糸と縫い針で，よこ糸を布に固定するなど利用した。
- 耐水性ポスターカラー。テーマにあわせたスローガンを描くのに利用した。

通常の活動場所である美術室にて作業をすすめた。織りの基本である平織りの方法を，指導者が用意したサンプルを示しながら簡単に説明した。その後は制作を通じて個別に指導をおこなった。

#### 制作の手順

① 平成20年度から，岐阜市より学校長あてにフラッグアートの制作依頼があり，部員たちは今まで経験したことのない大きさの作品をつくることになった。指導者から，絵画表現では個人差がかなりあることが不安であった部員たちに，「この実践なら皆が初めての体験であり，絵の得手または不得手に関係がないことと，協力しあって完成を目指すことで，部としてまとまりが出るのではないだろうか。」と提案したところ，興味を持ったようであった。

② 織りのもつ歴史背景(注12)と基本を簡単に説明したのち，フラッグアート用布を固定して張るための木枠つくりに取りかかった。市販の木ねじと釘，電動ドライバーと金づちを使用した。これには男子生徒（日常的に家庭で日曜大工の手伝いをしている）が自らすすんで中心となり，仲間に指示を出していた。作業はとてもスムーズであった。

③ 出来上がった木枠に，ガンタッカーを用いてフラッグアート用布を張った。油絵のキャンバス張りと同じ要領で行い，均一に張る。

④ 枠に貼られたフラッグアート用布に切り込みをカッターナイフで入れた。５センチ間隔で高さ120センチにした。

⑤ 家庭から持ち寄った布地を，よこ糸にするため裂いた。太さは任意とし，長さは出来るだけ長くとるようにした。途中で切れて短くなってしまったものは，端同士を結び長くし

た。

⑥　フラッグアート用布にいれた切り込みをたて糸にみたて，⑤で作ったよこ糸を織り込んでいった

⑦ たて糸やよこ糸の自重によるたわみの対処として，縫い糸で布の余白部分に固定した。

### （3）実践の様子

**・初めて作るものへの好奇心**

指導者がこの教材を中学生で扱うのは初めてであり，生徒には「織り」という行為を組み込んだ教材は経験もなかった。しかし，制作をすすめるにつれ，織りの持つ規則性や，よこ糸が折り重なった時の風合いに興味を持つようになった。また，役割分担や作業を協力しあう中で体を動かしながら対話をすることで，活動が活発になり積極的に取り組む姿が見られた。

**・テーマ性とデザイン試行**

今回は環境問題について考えるフェアのイベントの一貫として，作品制作の依頼があった。冒頭にも述べたように私たちのライフスタイルと密接な関係にある織りという行為も，環境問題を考える糸口になる。テーマがそのままデザインを考えることにつながることで，生徒たちにとって，この実践はより身近なものとなった。生徒が一人一案アイディアをラフスケッチしたものを持ち寄り，それぞれの良い点を発見しあう中で，部長を中心に一つの案にまとめたデザインが出来上がった。

**・体全体を動かす活動**

持ち寄った布のなかに，浴衣用の反物があったが，一人でこれを裂くには丈が長過ぎた。そのため，生徒たちは一人が反物を持ちもう一人は布の端を持って裂くという協力体制を取ることを考えついた。そこにもう一人加わり，裂いた側から巻き取っていくことで，活動の輪が広がった。この作業に関わった生徒たちは夢中になって楽しそうに，教室の中を行ったり来たりしながら活動していた。

また，よこ糸を織る作業では，布の大きさが生徒たちの身丈以上あるため，立ち上がったりしゃがんだりしながら作業する必要があった。平織りにしていくために，木枠を挟んで表側と裏側に一人ずつ立ち，よこ糸をやり取りすることで効率的に織っていくことを発見した生徒も現れた。

**・試行を繰り返し行う**

指導者はこれまでは高校生と短期大学生で織りの実践を行っており，中学生での展開は初めての試みであった。平織りを理解するまでに時間を要し，制作の中で上手くいかないことも多々あったが，生徒たちは何度もやり直すことで理解を深めていった。そして，作品が仕上がる頃には指導者の助言がなくても，色合いやデザインまでも考えて織ることが可能になっていた。

**・たて糸の方向による問題点の解決**

たて向きに木枠を配置すると天井に引っかかるため，たて糸を横方向に回転させて制作をおこなっていた。しかし織りすすめていくうちに，よこ糸の自重でたて糸の引っぱり強度が足らなくなりたわみが生じた。この事態に対し部員たちの話し合いの結果，よこ糸を上に引っ張り上げフラッグアート用布の余白に木綿糸で縫い止めるアイディアがだされ，試行したところたわみの問題は解決出来た。

制作中に何か問題が起きても，指導者の指示を仰ぐことなく，あきらめないで生徒たちだけの力で解決方法を探ることが出来た。これは織りの基本や方法が彼らに十分理解出来ていることと，ここまでの試行錯誤の結果だといえる。また，共同作業によって十分にチームとしてのつながりが形成されたことがうかがえる。

### （4）実践３のまとめ

**・「ものづくり」への第一歩**

「ものづくり」要素や観点を挙げるとするなら，「手仕事の味わい」である。この作品からは，よこ糸の素材や織り目に作品として制作者の個別性が出ることが共同制作の中にも確認出来た。これは工業製品のように均一な製品にはない，織りの持つ「手の仕事」としての味わいが引き出された結果だと考える。この味わいを

生徒が十分に感じ取ることができているからこそ，活動の様子は生き生きとしたものとなったといえる。

**・「織り目」への興味**

指導上とくに触れなかったが，よこ糸の引っぱり具合や打ち込み具合によって出来る「織り目」については，この年齢ではあまり興味を引くことはなかった様子であった。

それよりも，絵画表現とは違って，遊びの延長にあるような体を動かして作ることや会話などを通じて作品が仕上がっていくことに興味を示した。工芸的な美しさにはまだ考えがいたらないものの，織りの持つ行為性への魅力は十分に伝わった様子であった。

**・身体能力を引き出す活動**

また，卓上にとどまることのないこれらの活動は，作品を作る為に体のあらゆる器官を十分に稼働させているということの表れであるといえる。体を目一杯使うことで手先はよく動き，スムーズに制作がすすんだ。

そして，再試行を繰り返すことは，織りの基本の理解をうながすことも読み取れる。ゆえに時間をかければ，たとえ対象年齢が下がったとしても教材として転用出来るといえる。「織る」という行為は身体能力を必要とするが，生徒たちはそれに抵抗感を持つことなく自然と入り込むことが出来た。男女の性差なく遊び感覚で楽しめる教材であるといえる。

また，裂織りを体験する事で，捨ててしまうはずのものに，もう一度価値を与えることと，この題材で取り上げた「エコロジー」というテーマ性もあいまって，造形材料としての適性を感じる事が出来たという成果は，教材として大きな可能性を示すものである。

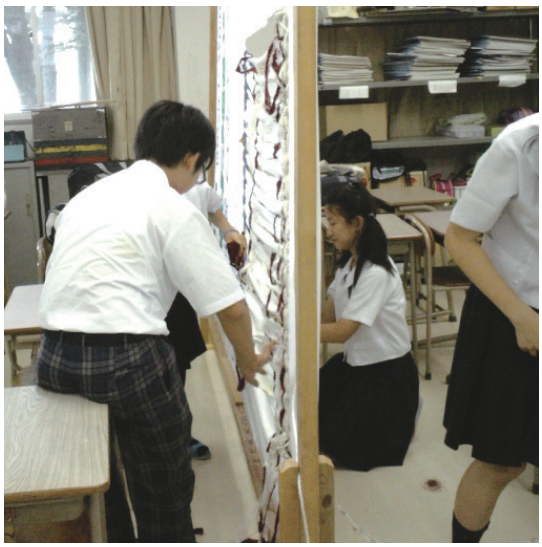
**実践３での活動の様子と作品**

実践３において，実践１や２と同様に活発な活動となった。生徒たちの様子や発言からは，仲間とともに一つの目標にむかって時間を共有していく喜びが汲み取れる。この年齢の発達に適した活動となった。

**実践３　制作中の様子―１　共同制作に取り組む生徒たち**

**（上段：木枠に布を貼り作業をすすめる）（下段：フラッグアート用布に切れ目を入れたところ）**

大きな作品のため，全員が協力し全身を使いながら組み立てていく。たて方向に設置すると生徒の背丈では作業しづらいため，横方向に設置して制作した。



**実践３　制作中の様子―２　共同制作に取り組む生徒たち（前頁右下・上段ともに　木枠の両側で織りに取り組む）**

木枠の表側と裏側両方でよこ糸をやり取りしながら織りすすめていく姿。

**実践３　制作中の様子―３　共同制作に取り組む生徒たち（持ち寄った布を裂いてよこ糸にする）**

素材は浴衣地の反物である。二人で布を裂き，もう一人は巻き取っていく姿。面積の広い布，丈の長い布ほど協力しあう必要がある。

**実践３　制作中の様子―４（よこ糸の重みでたて糸がたわむ）**

たて糸を横方向に配置しての制作のため，このような現象となった。よこ糸をフラッグアート用布の余白部分へ木綿糸で縫い付けることによってたわみを引っぱり上げた。

引っぱり具合や縫いとめる位置の不均一な様子が見られるが，逆にそれが味わいとなっている。

**実践３　制作中の様子―５（完成した織りの部分の拡大）**

大きな布にエコバックをかたどった織りの部分が完成した。よこ糸の織りムラや隙間など均一でないところに，ダイナミックさや素朴な手仕事の風合いを感じさせる作品となった裂き織り特有の織りによる色の混色具合が，作品に暖かみを与えている。

バックの持ち手の部分には，よこ糸を三つ編みにして取り付ける工夫がなされている。

**実践３　制作中の様子―６（屋外に展示されるフラッグアート）**

地元商店街アーケードに吊るされ，展示される作品の様子。自重でよこ糸が垂れ下がり，隙間からたて糸がのぞく（作品の中程）。偶然だが，それがバッグの籠目のようにも見える。

## Ⅱ　五感を十分に生かすことのできる「織り」教材の可能性

今日の美術教育において「織り」教材に取り組むことが，造形表現教材としてどのような可能性があるのかについて考察する。

**・人に備わっている身体的な感覚を十分に活用できる**

「織り」の行為には，視覚と触覚を相互利用することにより，体の機能全体，つまり五感を活動させる「視覚プラス触覚の効果」があると前号紀要で述べたが，本実践でも確認出来た。

現代の生活においてこどもたちは幼少の頃より，携帯電話やゲーム機，パソコンやテレビといった視覚優位(注12)の文化にさらされている。今後ますます身体機能の統合が必要とされる中で，人に元来備わっている身体能力いわゆる五感を引き出す可能性を持つ「織り」教材を，学校教育の場で取り入れる意義は大きいと言える。

**・教えられた通りのものから，新たな創造のアイディアをもたらすきっかけと可能性を導くことができる**

日本における「ものづくり」の代名詞といえば伝統工芸の職人があげられる。その師弟間での技術の伝承は最初「型」を学び，基本的構造の習得からである。ところが本実践で制作した作品は，商品としてはいびつで長期の使用に耐えうるものではない。逆にそのいびつさを個別性すなわち自己表現として認め，そこに価値を与えるのが美術教育であると考える。これを「型」からの逸脱ととらえ，新たな創造のアイディアをもたらすきっかけととらえるべきである。この一連の流れを下記に示す。

**美術教育における「型の習得」から「型の逸脱」モデル**

**型を学ぶ**

（ものづくりの基本の習得）

・型を試行，練習

・疑問や問題点の修正

↓

**型からの逸脱**

・さらなる試行，練習

・疑問や問題点の修正

・自己表現の獲得

↓

**新たな創造へ**

現在では伝統工芸の職人の師弟関係間での伝承も後継者は限られる。そこで「ものづくり」を次の世代に伝えていくためにも美術教育の持つ役割は大きいと考える。

**・人間の生活を表す「衣・食・住」を改めて見直し，ものづくりのよろこびを五感で感じ取ることができる**

「織り」の教材の実践で，生徒・学生たちは下記の過程を経て「ものづくり」のよろこびを，体をフルに使い味わうことができた。

- 視覚と触覚を使い，織りの基本を学ぶ。
- 自らの手で試行することで理解を確実なものにする。
- 疑問や問題があれば再試行する。

- さらに理解が深まる。
- 新たなものを生み出すことが出来る
- 自らの手でつくりだす喜びにつながる。

学校の中で「織り」を学び，身体機能つまり五感を十分に生かすことの出来る教材として，美術教育の意義が期待できる。

人は教えられなくとも，ものが握れるようになると同時に何かしらの筆跡を残すことが出来る。しかし，「織り」のような手の仕事，すなわち「ものづくり」はかつて生活体験の中で人から人へ教え，教えられ次世代へと伝えられていくものであったはずだ。ものは突然生み出されるものではなく，まずはその成り立ちや基本を理解しなくては成立しない。

本論冒頭の言葉「ファストファッション」「ファストフード」に代表されように，現代社会においてこどもたちの生活体験は薄れていく一方である。手の仕事が生活の中から離れていく中，今後，学校教育の意義は大きいと考える。

### Ⅰ，Ⅱのまとめ

戦前の日本には人間の生活基盤である「衣・食・住」の仕事の中に，ものづくりの方法的なものと精神的な両方の規範があった。だからこそ世代を超えて今日まで伝わることが出来たといえる。本実践の中にも登場する裂き織りの技法は，綿花を栽培することが出来ない寒い地域で生まれた独自の方法である。その方法ゆえに現在のように同一の素材・色で一枚の衣料が出来るわけではない。

しかし，その作品一枚一枚には，わずかなボロ布でも無駄にせず寄せ集めた布の中から色目合わせに心をくばり，家族のために仕事着や晴れ着に仕立てた人々の精神が込められている。当時の人たちは，その精神はものをつくる姿を直接見ることで感じ取ることができたろうし，いざ自分が誰かのために布を織る立場になった時に，本当の意味でその背景や意図を理解したであろう。

手間をかけることは心をかけることである。ものが大量に流通し使い捨てが当たり前の現代社会の課題は，それを理解し伝えるすべが存在しないことである。ものに込められた心や願いを理解することは，それを込める立場を経験せずして出来ることではない。

そのことを実感し考える機会を与えるきっかけとして，美術教育で「織り」の教材に取り組む意義は大きいと考える。（Ⅰ，Ⅱ文責　堀　祥子）

### Ⅲ　粘土を「織る」素材開発の試み

前稿のⅠの続きとして，「粘土を織る」の教材開発の試み第２報とする。

今回は，粘土を紐状にして織る造形は単独では組成上できわめて弱いということが試行の中から大きな問題点として明らかになってきた。

この問題は，造形物の大きさにも関係する。つまり，大きさが増すごとに構造的な弱さが高まるということである。このことは陶芸作品一般も当てはまることではあるが。

そこで今回は粘土で織る造形を支持体となる部分を求めることを行った。１つの試みとして中国の中山王墓出土品の中から本造形方法に適合するものを探しそれを支持形体として応用する試みである。

**写真10　銅象嵌勾連雲文方壺**

青銅　通高45.5　縦横11.4×11.4　重6.4kg

1977年　中山王墓出土

盛酒器。方形圏台，鼓腹，なで肩，直口，両肩に鋪首を持つ。器壁は薄手である。器全体に銅とトルコ石を象嵌した勾連雲文が取り巻く。

中山国は中国の春秋末期から戦国時代（紀元前６世紀から前３世紀初めにかけて，北方の少数

民族，白狄族が建てた侯国で，現在の河北省に在った。

資料　中山王国文物展カタログ　東京国立博物館他編集　日本経済新聞社発行　1981

この形は４つの面を持っていることから，粘土を織り込んだ造形を辺を除く面部分に当てはめられるのではないかという判断により選んでみた。

写真11　紙のレプリカ

平面の紙でどこまで形に近づけるかの最初ので，ほぼ平面性を維持した構成で成り立つことが確かめられた。

写真12　高質彫刻用発泡材による型の成形

写真13　高質発泡材のレプリカ

写真14　発泡材を型にした粘土で形つくり

＊注１）ファストファッション（fast fashion）…衣料品に最新の流行をとりいれながらも低価格に抑え，世界的に短いサイクルで大量生産し販売するファッションブランドやその業態のこと。早くて安いファストフードになぞらえて2000年代半ば頃に生まれた言葉である。商品の入れ替わりが早いゆえに買い過ぎや飽きも早く，ワンシーズンで使い捨てるファッションの買い方も若者の間で定着してきている。また，家庭からゴミとして焼却処分される衣料品は年々増加しており，環境問題としても注目されつつある。

＊注２）ファストフード（fast　food）は，短時間で作れる，あるいは短時間で食べることができる，あるいはその両方の食事のことである。そのほとんどが外食産業を想定しており，多くの日本人の認識としては，「アメリカ資本のフードチェーンが作る安価で手軽に食べられる，高カロリー食品や食事」である。過剰なパッケージや余剰食品の廃棄問題，また輸入食材に頼る日本の食料自給率

の問題などをはらんでいる。

＊注３）堀祥子,冨岡卓博：美術教育における「織り」の実践的研究Ⅰ　岐阜大学教育学部研究報告＝教育実践研究＝第11巻，p85，2009年２月。

＊注４）冨岡卓博，堀祥子，新井萌：毛糸による描画指導の試み　岐阜大学教育学部研究報告＝教育実践研究＝第10巻，p33，2008年２月

＊注５）前出。p93〜p97　対象者を同じとし，空き箱に手を加えて織り機を制作，裂き織り技法を使い，「織り」の基本構造の理解を促すためにテストピースを制作した。

＊注６）空き箱織り機の制作方法を示す。手順１／空き箱の両端に補強のため幅広の粘着テープを，縁をまたぐように貼る。そこに１cm（実践では任意で５mm）ごとに切り込みをカッターナイフで入れる。手順２／切り込みにたて糸を引っ掛けて止めていく。たて糸の両端はセロハンテープで止めておく。このときにたて糸を強く張りすぎると，空き箱の両端がたわむので注意する。手順３／必要に応じてほつれ止めの厚紙（今回は２センチ幅を使用した）を箱の長さにあわせて用意し，たて糸の織り始めに挟み込む。

空き箱の縁に補強のテープを貼り，切り込みを入れ，そこにたて糸を引っ掛けていく。ほつれ止めの厚紙と厚紙の間によこ糸を織っていく。

＊注７）綜絖（そうこう）…たて糸を上下に一本おきに分けることで，たて糸の間によこ糸の通り道をつくる道具のこと。

＊注８）板杼（いたひ）…織る時によこ糸を巻き付ける道具のこと。

＊注９）ブランケットステッチ…刺繍の技法の一つ。おもに布端のほつれ留めとして施される。前掲論文。岐阜大学教育学部研究報告＝教育実践研究＝第10巻，p47

＊注10）フラッグアート…1997年から毎年，岐阜市では中心地にある柳ヶ瀬商店街アーケードに横３m，たて1.8mの布に描かれた作品をアーケードにつり下げて展示するイベント「岐阜フラッグアート展」を行う。総合監修を日比野克彦氏。2006年には第11回「ふるさとイベント大賞」の大賞を受賞している。この展覧会になぞらえ，同様の地域イベントも多数おこなわれており，本実践で出展した「岐阜市環境まるごとフェア」もその一環である。

＊注11）裂き織り（さきおり）…地方によりサッコリ，サッキョリなどとよばれる。たて糸に麻や藤，木綿などの糸を用いて，よこ糸には細く裂いた古い木綿を織り込んだ布のことである。技法と製品を総称して裂き織りと呼ぶ。木綿は汗を吸い，厚みがあれば風を遮ることから，山や海での仕事着や，また冬のこたつがけなど，時には晴れ着として自家用に織られていた。戦前，綿花を栽培出来ない東北地方では北前船によって大阪方面から運ばれる古着やボロ布を手に入れるのがやっとであった。わずかでも使える部分があれば細長く裂いて織るため，貧しい農家などでの冬場や夜間の家庭における女性の仕事であった。現代では趣味として女性を中心に人気がある。

＊注12）前掲論文。岐阜大学教育学部研究報告＝教育実践研究＝第11巻，p104　厚生労働省の「21世紀出生児縦断調査」および，日本PTA全国協議会の発表した「平成19年度子どもとメディアに関する意識調査」の結果から考察した。

## 参考文献

木綿口伝　著者　福井貞子　発行所　法政大学出版局　発行日　1984年12月１日初版

裂織の本　著者　八田尚子　発行所　晶文社　発行日　2000年8月10日初版